
【ヘタリア】追憶のヘタリア

再来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【ヘタリア】追憶のヘタリア

【Nコード】

N0699Z

【作者名】

再来

【あらすじ】

黒い星に願い事をする、願いが叶う
という言い伝えを聞いた。

国が消えて、世界が壊れていく。

失われて、現れて。

国等はこの無限のループから抜け出し、悲劇のゲームから抜け出せるか。

地球を巻き込んだ悲しみと希望と悲劇と絆の二次創作。

プロローグ

昔のはなし。

全てが闇に包まれて
永遠の夢を悲しむ
道なき道は道ではなく

なんだっけ。

？

「獣道だろ？」

横に居たロマーノが口を挟んだ。

「え、そうなの？」

イタリアは手に持っていた本を閉じて置いた。

その本の名前、《三日月道》

道はなんだ、とか、道につながる、

夢、だとか、嘘、だとか、

いろいろ書かれているが、

とりあえずは絵本に入る、不思議な本。

イタリアはまた開き、読み始めた。

言い伝えに残るは
紅い華と蒼い華
両方開けば道になる
道にならないことなれば
運命今に開かずや
黙も闇も溶け込むだろう
戻ることままならず
猛き者終に及び
新しく世界は終わる
新しき世界は始まる

それもまた

「運命、かあ」
ヴェ、ヴェ、と鳴いた。

「なんか怖い本だな、それ。こんなものスペイン持ってたのか？」
ロマーノは、本を覗き見た。
挿絵は、黒い宇宙に、青い惑星、地球が、
罅をいれて割れる様が、クレヨン調で描かれていた。

と、まあ、ここはスペインの家である。

ロマーノはいつも通り、部屋の整頓としてスペインの部屋を掘り返
していたが、

イタリアは意味もなく、ここに来ていた。

ロマーノはイタリアから本をひったくると、パラパラとページを捲
り始めた。

そこで、気になるページを見つけたのか、その場所をまじまじと見
た。

挿絵には、黄色い髪の毛で、どこかの人形みたいなものが、大きく描かれていた。

というか、顔がアップで映されたようなものだ。

背景が真っ黒なのに、その人形の肌も黒いのである。

全体的に真っ黒なページに、白い文字でこう綴られていた。

人及び国は傲慢である

未知なるものに目を奪われる

幸せを永遠に求める

ある人形はこう告げた

そんな輩はわたくしが

茨で包んで育みましよう

育った花は私のももの

私だけのお人形

それを聞いたある国は

栄えていたのに争いで

争いで消滅した

「なんだこれ……」

「争いさかいで？それって、戦争かな？」
「しらねえけど……」

巻きつくつた鳶は一度きり
犇ひしめく祭壇

悲劇に憑りつかれ
何時をも漂う
歩いて歩いて
迷うに値し
友を傷つけ
いつまでこの世を彷徨うか

「こんなことはっか書いてあるのか？」
「ヴェー、スペイン兄ちゃん、変な趣味ー」
と、そこで、スペインがタルトを持って帰ってきた。
「ロマーノ、イタちゃん！タルトやで！ベルギーが作ってくれたん
や」
「わあい！！ベルギー大好きー」
「ふん、休憩にするぞ、コノヤロー」
と、散らかった部屋のど真ん中で、食べ始めた二人。

あの本には、まだ続きがあった。
ただ、破られていた。
何処に行ったのかもわからない。

その本には闇がある。暗い暗い、闇が。

まだ、何も始まらない。

静寂が終わる。終わりが始まる

プロローグ2

あ、永遠が終わる。

黒い星、光った？

私の出番？

嬉しいな

壊せるな

楽しみだ

行こうかな

よし行こう

？

「ヴェ、なんだっけ」

突然イタリアが何かを思い出しそうな感じになった。

「黒い星、光る？んー、思い出せない……」

「星？知らないぞ？」

あれから、スペインはまた、農業をしに行った。
スペインの部屋には二人しかいない。
ちゃんと片付けえな、という、部屋の持ち主の話も聞かず、
まだまだ荒らすつもりのような。

「あ、そうだ、思い出したよ兄ちゃん」

「おう、言ってみろ」

「黒い星、流れ星に願い事をする、願いが叶うんだって！」

「え、まじかよ！でも、黒い星、って、見えねえんじゃねえ？」

「黒くても、光ってるからわかるんだって」

と、そういう話から、

「そうだ、明日、皆に言おうかな」

「わかった、広めるんだな」

と、主旨が変貌した。

で、それから、イタリアは、普通に帰宅した。

何も無い。皆無。特別なことは何も、何も無い。

なのに、イタリアは、眠れなかった。

わくわくして、ただの噂だった黒い星を、

皆に広めたい、そう言った気持ちでいっぱいだった。

少し、おかしくなったかのような。

何かに、憑りつかれたような。

それから、二時間はベッドの中で眠れずにいたが、
とうとう睡魔に勝てず、寝てしまった。

そして、終わりが近くなっていく。

？

明日？明日かあ

楽しみだなあ

緊張するなあ

楽しみだなあ

壊したいなあ

終わらせたいなあ

楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ
楽しみだ楽しみだ
楽しみだ

楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ
楽しみだ
楽しみだ

みだ
楽し
みだ
なあ

日が昇る。

今夜が最後だ

今夜終わる

人形が、動く

?

「ヴェー、おはよう！」

元気よく起きたものの、まだ空が暗いままだ。
早く、起きたんだ、俺。
と、愉悦感に浸ってみる。

陽は、そろそろ昇る。

日本はもう起きてるかな。
ドイツは起きてるかな？
でも、意味はないのかな
いつ起きてても、同じこと

あれ？

俺、いま、何を考えた

？

イタリアは勢いよく首を横に振った。
なんか俺おかしい？

おかしくない、俺は俺だし

でも、いまの、俺？

……まあ、いいかなあ

そして、ベッドから降りた自分の恰好が、軍服を着ていることに気が付いた。

うわあ、俺、このまま寝てたの!?

「ヴ、ヴェー」

泣きそうな声で鳴いた。

あ、今日は世界会議だったけ。

何をすればいいっけ？

そうだ

ク
ロ
イ
ホ
シ

うん、楽しみ。

皆に言わなきゃ。

それから、ドイツ、日本に電話した。

「一緒に、会議行こうよ」

?

ユメモコワソウセカイトイッショニ
アトニナニモノコラナイヨウ
コナゴナニクダイテシマオウ

サア、セカイガコワレル

「あ、日本ー」

「い、イタリア君!!」

世界会議の時間の一時間前。

待ち合わせの時間の三十分程の時間。

とてもはやい、そんな時間に。

イタリアがやってきた。

「イタリア君!!と、とても早いですよ、どうしたんですか……」

「えー、なんか、早く来ちゃったから」

赤飯、もう少し炊いておけばよかったです、と、

日本は呟いた。

それから十分後にドイツが来た。

「な、な、何故だイタリア!!」

「え、何でって言われても……」

やはりドイツも感心して歓心したようだった。

俺、やっぱりこの二人が大好きだ。

イタリアは改めて思った。

この二人は壊したくない？

え？

ふと無意識に意識して考えたその言葉。
二人を壊す……、どついう意味だろう。
とついか、俺は一体？

あれ、頭が痛い。

イタイ？

「え？」

「どうした」

「イタリア君？」

二人は何かを話していたようだったが、わからなかった。

「何か言つてた？」

「ああ、今年の事業企業のことを」

「イタイって、言つた？」

「いいえ、痛い、とは……？」

俺にもわからない。

頭が痛いつてだけで……

イタイ？コワレル？

「な、なに!？」

「どうした、イタリア!」

「少しおかしいですよ、イタリア君。如何なさいました?」

「だ、だいじょう

コワスコワスコワスコワスコワスコワス

」

イタリアの声で、ある単語が繰り返された。

「な、い、イタリア!?!?!?!?!」

「どうしたんですか、イタリア君?!?!」

「……なにも、ないよ」

「何もないわけないだろう!?!」

「大丈夫、声が聞こえるだけ、違う」

「声……?」

「違う、頭が痛いだけ」

「そんな風には

」

「いいから、会議場、いいつつ」

イタリアは、無理をしているように笑った。

会議場に着いた三人。

ドイツと日本は心配そうなめをイタリアに向けている。向けられている当人は、少し白い顔をしながら笑って、既に集まっている国達に、

「おはよう、皆元気？」

と挨拶をした。

「お、イタリアー。お前はやいなあ、今日」

と、メイドさんと話していた男が、こちらを向いて言った。フランスである。

「うん、今日は早く起きたんだ」

と、イタリアはその男のもとに駆け寄った。

残された枢軸の二人は、首を横に振って自分たちの席に座った。

「どうしたあるか、なんか暗いあるよ、日本」

「中国さん……」

後ろからウーロン茶（hot）を差し出されて、後ろを見た。

メイドさんに止められている中国がいた。

「中国さん、私がやりますよ、お茶を淹れることくらい！」

「もうやってしまったある。きにすんなある」

「……」

何をしたいんだ、とか思ってしまった日本だったが、頭かぶりをふった。優しさでやったんだろう、とも思えた。

その一方で、ドイツは謎のマニュアルを読んでいた。

題名は、《うわごとと魔術》

おそらくイタリアのさっきのことで調べていたのだろう。しかし、似たようなことが書かれていない。

頭を悩ませた。

会議場に居るのは、

紅茶を飲むイギリス、

ナンパをしているフランス、

リトアニアとラトビアをニコニコとみているロシア、

メイドと口論している中国、

オーストリアとハンガリー、

中立兄妹、

スペインとベルギー、オランダ、

エストニアともちも次いで、

北欧はアイスランド、ノルウェーの兄弟を抜いた三人、

枢軸の三人が、

それぞれ自分たちのことをしていた。

そこに、バアン、と大きな音を立ててドアを開ける人物がいた。

「よし、今から世界会議を始めろぞ！！　ってあれ？なんか地味に少くないかい？」

眼鏡を押し上げてまじまじと、集まっている国の顔を眺めた。

「まだ時間じゃねえぞ。しっかり時計見ろよ」

とイギリスが言った。

「ふうん。それにしてもイタリア、今日は早いね！」

「うん、頑張っただけだよ」

普通に答えた。

?

まだ、序の口だ。
まだ、全然、甘い。

苦しめよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0699z/>

【ヘタリア】追憶のヘタリア

2011年12月11日08時49分発行